

麦被覆栽培におけるコンニャク肥大期の窒素追肥効果

福島県農業試験場こんにゃく試験地
平成13年度福島県農業試験場試験成績概要

1 部門名

特用作物ーコンニャクー施肥法
分類コード 06-02-13000000

2 担当者

平山 孝

3 要旨

コンニャク栽培では、従来の敷きわら栽培に代わり、大麦被覆栽培が主体となっている。これは、コンニャクの培土時に秋播性の強い大麦を播種すると、7月中下旬に自然座死することを利用するものである。

一部農家では、大麦が生育過剰となった場合、球茎の肥大に影響を及ぼすことを懸念して、生育中期に窒素追肥を行っている。そこで、この時期の窒素追肥による増収効果と施用時期について検討した。

- (1) 窒素追肥は大麦の座死開始時期に当たる7月中旬の施用で球茎・生子とも最も増収効果が高くなった。また、施用時期が遅くなるほど増収効果は小さくなり、8月中旬の施用では増収が見られなかった。
- (2) 球茎の腐敗病罹病率は、施用時期が遅くなるほど若干増加する傾向が見られた。

以上より、コンニャクの大麦被覆栽培において肥大期に窒素追肥を行う場合、大麦が座死を始める7月中旬の施用がもっとも増収効果が高い。しかし、気象条件によっては生育後期の病害(腐敗病等)を誘発したり、球茎や生子が未熟となる心配があるため、肥切れが予想される場合の応急的な対策とする。

4 その他の資料等

なし